

エイブルサポート系

教育臨床チーム

村川 治彦

(応用人間科学研究科非常勤講師)

○村川 それでは、教育臨床プロジェクトの2007年度の活動について発表させていただきます。

まず、教育臨床プロジェクトでは「ホリスティック」「インテグラル（統合的）」「スピリチュアル」というパースペクティブをとおして、対人援助の理論と実践について研究を進めております。ほんらい相互連関的な対人援助の諸実践に対する研究として、諸分野を統合する視点の獲得と実践方法の開発は不可欠であり、本プロジェクトは、こうしたアプローチを「ホリスティック」「インテグラル」と呼び、主として教育、医療、福祉の分野を横断する対人援助学の創造をめざしております。

本年度にとりあげた具体的なトピックは、戦争体験（トラウマ体験）へのドラマセラピー的アプローチ（平和教育）、教育・社会福祉におけるホリスティック・アプローチ、統合医療、表現アート、坐禅研究です。

まず、戦争体験へのドラマセラピー的アプローチでは、戦争体験が社会的なトラウマとして世代間にどのように受け継がれ、それが現代のさまざまな地球的、社会的規模での暴力の問題に影響を与えているかを体験的ワークショップを通して探っています。それから、心身二元論、機械的身体論に基づく西洋近代医学に対して、よりホリスティックな心身観に基づく医療のありかたを「一人称のからだ」という視点から探るために、ボディワーク、身体志向心理学、心身医学の専門家が集まる会議を主催しました。またこのほかにも、出版物として、私たちの研究をもとにした単行本を刊行してきました。

それでは、それぞれの活動を具体的に説明させていただきます。まず10月に立命館大学創思館で行いました「21世紀統合医療フォーラムー心身医学と

一人称のからだの出会い」では、西洋近代医学の枠組みに対する根本的な視点の転換を前提とする心身医学、ホリスティック医学の実践に、東洋と西洋の「一人称のからだ」(Somatics※動きや感覚、呼吸などを通し、自らの心身を内側から探る西洋のアプローチの総称。日本ではボディワークとして知られている)の探求がどのように貢献できるか、その可能性を探ることを目的として、心身医学に従事する医療者や、ホリスティックな看護、介護、心理療法の専門家120名〔2日間ののべ参加人数〕が集まりました。日本で行われている優れた「一人称のからだ」の探求の実践を自ら体験し、その体験を踏まえて、患者や医療者自身の「身」にアプローチするうえでの様々な問題点、あるいは今後そうしたアプローチを医療現場に導入して行くためのあり方などについて2日間にわたって対話を行いました。基調講演には、応用人間科学研究科の提携校California Institute of Integral Studiesの教授で、立命館大学客員教授のDon Hanlon Johnson先生と、日本心身医学会理事長である関西医科大学教授中井吉英先生にお越しいただき、欧米的な心身二元論に基づくPsychosomatic Medicineとは一線を画した日本的「身」の医療としての心身医学の重要性についてご指摘いただきました。続いて、富士見幸雄先生(プロセス指向心理学)、鎌田麻莉先生(エサレン®ボディワーク)、津村喬先生(養生気功)、中川一郎先生(タッピング・タッチ)、吉良安之先生(フォーカシング)、小原仁先生(バイオインテグラル・サイコセラピー)、安田登先生(ロルフィング)、相原由花先生(アロマセラピー)、竹林直紀先生(マインドフルネスアプローチ)、高野雅司先生(ハコミ)、北村翰男先生(操体法)、神原憲治先生(バイオフィードバック)、山本和美先生(ヨーガ)、石井ゆり子先生(アレクサンダーテクニック)ら、各専門のトップクラスの先生方に、1時間半という短い時間でしたが、それぞれの実践を体験的にご紹介いただきました。それを踏まえた上で、次の21日に研究発表ということで、今後の共同研究の試みや臨床面の課題などについて医療者の方から提言をいただき、全体でそれについて討議しました。

こうした優れた実践家と医療者が一堂に会することは、これまでの日本ではかつてなかったことであり、今後も毎年1回開催し、世界的な統合医療の

流れの中で、代替・相補医療と西洋近代医学の混在ではない、日本人の「身」に根ざした患者中心の「統合医療」のあり方を探っていきたいと思っております（なお、今年は京都文教大学で10月18、19日開催を予定しております）。

続いてもう一つ、5月に行いました「こころとからだで考える歴史のトラウマ」という催しについて説明させていただきます。アジアの戦後世代が継承する戦争体験をテーマにしたこの催しでは、従来の戦争体験の語り継ぎが特に聞いている側の抱く感情に焦点をあててこなかったということが、戦争体験を意味ある形で受け継ぐことができていない一因であるという反省にたっています。つまり戦争の体験ということを聞いたときに、その経験をリアルに感ずれば感ずるほど、さまざまな感情が起きてくる。悲惨さんに対する悲しみであったり、怒りであったり、絶望感であったり、そういう感情的なものもきちんと受けとめた上で、そうした戦争体験を継承していくということをしていかないといけないだろうというのが一つあります。もう一つは、日本、中国、韓国など、東アジアの国々の戦争世代が、それぞれの親から受け継いできた戦争体験を分かち合う上で、今言ったような感情的な面での受けとめ方の大きな違いというのがあって、それをどう克服していくかということが、これからのアジアの若者にとって問題であろうと考えるのです。歴史学的な知識的理解だけではなく、それを自分たちの被害者、あるいは加害者両方の面でどういうふうを受けとめていくのかということをしかりと考えることは、今後どのような世界を築いていくかということを考えるうえで大切であると考えています。

この催しではアメリカから、ユダヤ人とドイツ人の間の和解のワークをずっと20年以上にわたって行なってこられたアルマンド・ボルガス氏（California Institute of Integral Studies元准教授）を招きまして、彼がドイツ・ユダヤの間で、和解ということで開発してきたアプローチを、日本やアジアの国々でも応用できるかを確かめようとなりました。具体的なプログラムとしましては、2日間のワークショップと、それを踏まえた上で、その研究を一般の人々の前で分かち合うというプレーバックシアターというものを行ないました。

これは（現物を提示して）、その模様を毎日新聞が報道した記事です。これまでそうした歴史の体験というものを、実際に直接経験された方々の語りという形で聞く機会があっても、例えばそれを聞いてきた戦後世代、大学生とかがどう感じたかを公の場で分かち合うという機会は、ほとんどなかったと思うのです。また、直接自分で戦争体験を親や、あるいはおじいさん、おばあさんの世代から聞いていなくても、実はさまざまな形で自分の中にも残っているということ、ほかの人々の話を聞いたり、感情を受けとめるなかで見出していくこともあります。たとえば戦争はいけないものだという教えと、それほどまでに悲惨な戦争が今もって現に続いている現状との間で感じるジレンマとか、そういう気持ちもまずきちんと表現していこうという形で行ないました。

昨年の11月に中国の南京の方に行きまして、同じような形で南京師範大学の方々と、お互いの気持ちを分かち合おうということで行ない、そうした戦争体験者の話を聞いて、それを一緒に中国人、日本人等が分かち合うという試みもしてきました。来年度も、このような試みを続けていきたいと思っております。2008年の7月に再度プレーバックシアターという形でヴォルカス氏を招き、また、南京で日本の学生さんと中国の若い世代とが共同研究をしていくというようなことを試みてまいりたいと思っております。今後、このような活動をふまえて、平和教育について成果を出していきたいと考えています。

教育臨床プロジェクトの活動としては、ほかにもホリスティック・アプローチに関する研究会開催や、坐禅と西田哲学の継続的な研究、表現アートの研究などがありますが、以上が2007年度の活動の大きな部分です。

○司会 どうもありがとうございました。それでは御質問、御意見ありますでしょうか？

○質問者 どうもありがとうございます。今年度は人称性ということをもぐってシンポジウムを、教育臨床プロジェクトと一緒に行ないました。一人称の話ですね。先ほど先生がおっしゃったように、だれがだれにという、この人称性と対人援助の関係について、二人称と一人称がどう結び付くのか、な

かなかこれまですれ違っていたのが、一つの可能性を感じたと思うのですが、あのことについて先生、どういう御感想をお持ちですか。

○**村川** 一人称ということは、どのような対人援助であっても一つの出発点としての位置づけをしておくことが必要だと思います。従来、どうしても援助の対象者がいて、だれが援助するかという形だけがあって、その援助者の側の主体の行ないというのに余り焦点が当てられてこれなかったのではないかと思います。最終的に対人援助ということですから、二人称で行うのですが、それをまず三人称的な形で提示していくということと同時に、援助をしている私たち一人ひとりの一人称のあり方というもの、それも明確にしておかないといけないと思います。シンポジウムで私が個人的に感じたのは、一人称の場合はきちんと言語化していくということが全く不十分だということです。きちっとその部分を、一人称的な視点からどう言語化して対話に入れていくかということが、今後、非常に求められているなということを感じました。

○**質問者** じゃあこの一人称というのは、援助者が要するに一人称というふうにとらえてもいいということですか。

○**村川** 援助者も人間であるわけですから、私という人間がいかに援助する行為を行なっているかということは基本になります。当然、対人援助という枠組みの中で考えたときには、援助者としての自分、援助の基本にある人間とはどういう存在であるかというのは、きちんと問い続けていかないといけない。それは一人称と二人称のどちらか一つではなくて、あくまで対話というか…。自分のあり方や一人称のあり方が対人援助の場面でどのように反映されていくのか、そこを振り返った上で、援助に取り組む。それは常に循環的なプロセスだというふうに思っております。

○**質問者** ありがとうございます。

○**司会** どうもありがとうございました。